製品領域－１０

第4回
いしかわエコデザイン賞2014
応募製品・サービス

上林金沢茶舗

「休耕地を活用し無農薬でつくった能登の紅茶（和紅茶）」

休耕地を活用し無農薬でつくった「能登の紅茶(和紅茶)」

１　背景

(１)現状

近年の慌ただしい生活の中で、日本茶をゆっくり楽しむ機会が少なくなり、ペットボトル入り飲料の普及とともに、日本のよき「茶の間文化」が衰退しつつある。また、日本茶の購入はスーパーマーケットなどで求めることが多くなり、日本茶専門店の存在感も薄れてきた。

(２)石川県のチャの歴史

石川県でチャの栽培が本格的に始まったのは約３００年前、３代藩主前田利常にまで遡る。利常が隠居し、小松城主になってから、茶の栽培を奨励し、産業振興を図った。それが、徐々に広まり、県内全域で、栽培されるようになり、明治期に入りチャの栽培が本格化された。しかし、戦時中は贅沢品のチャより米栽培が奨励され、広大な茶畑が消え、それ以後、復興することがなかった。

こうした、背景の中、「いしかわのチャの復興」と「若者からお年寄りまでが安心して味わえる日本茶」を目指して立ち上がったのが、打越製茶農業協同組合と石川県茶商工業協同組合である。志を同じくするものが集まり「茶れんじの会」を結成し、５年前に「加賀の紅茶」の製造に着手した。

残念ながら、能登地区に茶畑が見つからず、それでは、一から茶畑を復興しようと取り組んだのが「能登の紅茶」づくりである。。

２　事業の内容

平成２４年５月　４００本植樹

平成２５年５月　順調に成長

平成２６年７月　茶畑

（１）茶樹の栽培

本事業は、能登の地に茶畑を広げ里山の保全と活性化を図ることがねらいである。能登島の休耕地を借り受け、初年度は、試験的に２年ものの茶の苗木「やぶきた」を植樹したところ、順調に成長した。そこで、2年目は「おくひかり」を４００本、さらに、3年目の本年度も「おくひかり」を増植し、合計１０００本となった。茶樹は成育するのに５～７年かかり、現在、北陸新幹線開業に向けて商品化をめざしている。最初の商品化は３０kgを目標に３年後には５０kg、10年後には５００kgを目標とし、全国に販路を広げ、能登の魅力を発信したいと考えている。

「能登の紅茶」づくりにおいては、「加賀の紅茶」に携わったノウハウを生かし、打越製茶農業組合や中能登農林事務所等の協力のもと事業を行っている。

（２）能登島の風土にあった和紅茶づくり

能登の自然に合ったの栽培法を研究しながら茶樹を育て、能登の特産品として、和紅茶「能登の紅茶」の商品化をめざす。

能登の気候に合うかどうか心配されたが、茶の栽培の北限といわれる新潟県村上市の茶畑を視察し、気温が低い能登島でも十分に育つことや無農薬でも十分に育つことを確信した。

また、茶れんじの会の会員や紅茶愛好家が集まり、「能登の紅茶研究会」を開催し能登の紅茶の特色をどのように出せばよいか、味、香り、水色等の研究を行っている。能登島の赤土で育った「能登の紅茶」は強い自然の甘みが特徴である。

「能登の紅茶研究会」の様子

３　将来に向けて

本事業の目的は「里山保全」と「いしかわのチャの復興」にある。この事業を発信することにより、「休耕地に茶の木を植えてみよう」という人が増え、茶畑が広がり里山が元気になることを強く願っている。